

黒田淳之助さん



くろだ じゅんのすけ

大井川右岸土地改良区理事長  
平成元年から17年までの17年間、旧小笠町長を務める。県町村会会長、県農業構造改善協会会長などを歴任。平成10年に大井川右岸土地改良区理事長に就任、用排水施設の整備・管理や農地整備にリーダーシップを発揮する。

# 母なる川の

久米勇さん



くめ いさむ

吉田町漁業協同組合代表理事組合長  
昭和37年からしらす船曳き網漁業を営み、昭和58年から漁業組合の役職を歴任。平成10年には県漁業指導士に認定される。平成13年に吉田町漁業協同組合代表理事組合長就任。ほか多数の役職に就く。

# 過去に学び

小澤節子さん



おざわ せつこ

白羽山はばたきの森に集う会会長  
川根本町上長尾在住。モアラブ川根の会で数々の地域おこし活動を実践。その後、大井川を再生する会役員などを歴任。近年では白羽山での植林や育林に取り組み、里山の保全活動に尽力。「中川根ふるさと通信」の発行者。

# 今を見つめ

洲崎燈子さん



すざき とうこ

豊田市矢作川研究所主任研究員  
早稲田大学大学院人間科学研究科で修士課程卒業後、理工学研究科で物理学および応用物理学を学ぶ。その後、豊田市矢作川研究所に入所。矢作川流域の河畔植生や里山の現状、望ましい管理手法など調査研究に従事する。

# 未来を創造

# 共に考える



●コーディネーター  
山田辰実 やまだ たつみ  
富士常葉大学環境防災学部教授  
瀬戸川フォーラム代表、めだか倶楽部静岡代表。フィールドでの環境教育を実践している。NPO法人「里の楽校」理事長。

「大井川」とは、大きな井戸の川という意味。くんでもくんでも水が尽きない水がめ、という素晴らしい名前です。大井川の水は、流域周辺の人々に大きな恵みを与えています。今大井川に親しむ人の数は、むしろ減ってきているように見えます。と、山田辰実コーディネーターの発言が始まったパネルディスカッション。大井川の未来を創造するために、何を考える必要があるのか。討論の模様を振り返る。

山田 まずは久米さん、漁業に関する面白い言葉に、「シラスは山で生まれる」という言葉がありますね。これはどういった意味なのでしょう。

久米 シラスの餌であるプランクトンは、山から川へ、川から海へと流れ出た泥と海水が混ざったところに発生します。そのプランクトンを食べて育つシラスは、大きな意味で「山で生まれる」ということなんです。

山田 シラスが生まれるのは、実は大井川の源流なんだと。源流の森がはぐんだミネラルこそが、シラスの栄養分になるんですね。大井川流域の人々が、そういった広い視野で、川の事を考えられたら素晴らしいですね。

黒田 わたしたちの生活は、すべての面で大井川の恩恵を受けています。わたしが旧小笠町で町長を務めていたころ、議員や町民からよく聞かれたのが「大井川の水利用と水路橋」についてでした。右岸は昔から大井川を頼りにしてきた

姿勢というのは、大井川流域でも参考になるのではないのでしょうか。

洲崎 豊田市矢作川研究所は、自然と人のかかわりという面を研究しています。矢作川では、昔から川の恵みを受けながら生活する人がたくさんいました。地元漁協も、河川環境を守ることを第一に取り組みを進めています。現在、川の価値というものは、ともすれば忘れがちです。しかし、本当はなくてはならないものなんだと、研究所の活動を通して伝えていきたいと思っています。

山田 川にすむ「淡水魚の王様」といわれるアユ。太陽の降り注ぐ季節には、1日ぐつと成長します。しかし現在、大井川のアユに元気がなく、数も減ってしまいました。わたしたちは、何とか大井川を元気にしたい、たくさん生き物でにぎやかにしたいと思ひ、調査に向かっています。しかし、なかなか回復の兆しは見えません。川の姿も、ずいぶん変わってしまったようですね。

小澤 大小さまざまなダムができ、上流側に土砂が堆積しています。下流部は逆に河床の浸食が見られ、海岸線にも影響が及んでいます。この傾向は、ここ50年で進んだと思われれます。

山田 ダム湖特有の川の笹濁り（白っぽい濁り）というのにも気になりますよね。

小澤 井川ダムまでに濁りが強くなり、そのまま導水管へと入ります。表流水は川の浄化作用によって濁りが取れますが、導水管に入った水は濁ったまま。その濁り水が下流域で飲料水として使われているんですね。これはとても残念なことです。もつときれいでパワーの

山田 大井川の水のありがたみというのは地域全般に根付いていますか？

黒田 受益者は当然感謝しています。しかし一般的には、蛇口をひねれば水が出て当然」という意識が強いと思います。

小澤 今の大井川の姿を見ると、本当に悲しい気持ちになります。少しでも表流水を増やしてほしいと願っています。

山田 水利用という面もありますから、簡単には解決できない問題です。昔の大井川は、地域の人にとって身近な存在でした。「流したい」と「御霊おくり」など、地域に根付いた文化もたくさんありました。これらは、水の神様へのお礼や感謝の気持ちを表しているんです。

山田 そういった行事は、今では一部の地域で残っているだけです。消えてほしくない大切な文化です。

山田 流域の人々が、代々受け継いできた誇りある川の文化。消えてほしくないですね。豊田市の矢作川では、住民が主体となった河川環境保全が盛んです。そこで実施されている活動や取り組み

ある水を供給してあげたい。取水口を一本にするなど、方法はいろいろ考えられると思います。

洲崎 もう少し効率よく上手に取水すればということですね。近年では濁水対策の協議なども進んでいると聞きますから、その進捗よくにも期待したいですね。

久米 ところで矢作川では、川の水を生み出す「森林」の調査なども盛んに実施されています。安定した水を供給するためには、山が果たす役割が大きいということですね。大井川流域ではどうでしょう。下流域の人々が森づくりに参加するといった動きはないですね。

山田 当然、考えていかなければならないと思っています。行政を通じて一緒にやっていけたらと思います。

山田 矢作川では、名古屋市の市民団体が森林ボランティア推進協議会をつくり、山仕事の手伝いをしています。ボランティアの人々に「森の応援団」として山に入ってもらおう。都市部の人々は、自分たちが普段飲んでいる「水」の源を知ることになり、山主は山の管理ができる。双方に良い結果を生んだのではないかと思います。